

不育症患者の心理・社会的状況

横田 美穂

日本医科大学付属病院看護部

The Psychosocial Situation of the Recurrent Pregnancy Loss Patients

Miho Yokota

Department of Nursing Service, Nippon Medical School Hospital

(日本医科大学医学会雑誌 2012; 8: 31-37)

Key words: recurrent pregnancy losses, psychosocial situation

はじめに

不育症とは、成立した妊娠を流産・死産などで完遂できず、健康な生児に恵まれない症例を指す。近年、マスメディアでも注目されるようになり、一般の人々にも少しずつ認知されるようになってきている。当院でも、不育症専門外来があり、抗リン脂質抗体症候群や凝固系の異常に対して、低用量アスピリン・ヘパリン併用療法を行い、多くの不育症患者が出産している。しかし、患者は妊娠前から病院に通院しているが、その時期に看護師が関わることはほとんどなく、不妊症看護認定看護師が行っている不妊症・不育症相談室を利用する患者も少ない。妊娠し、ヘパリン療法を行うようになってから、自己注射の手技を習得するための教育入院期間中に看護が介入することが多くなった。平山ら¹は、不育症を一言で表すと、「子どもを失うことを繰り返す」体験であり、対象喪失である。患者にとっての喪失の意味や重要性を認め、患者がその悲しみに向き合い、そして乗り越えていけるように援助することが重要であると述べている。杉浦²は、抑鬱、不安、敵意、恐怖症性不安、妄想様観念、精神病性症状、身体化症状、強迫症状、対人過敏の精神症状が流産帰結に与える影響を調べたところ、抑鬱のみが流産の危険因子であったと報告している。以上のことか

ら、不育症患者が健康な心の回復過程をたどり、心理・精神的に安定した状態で日常生活を過ごすことは、次の妊娠のためにも重要である。したがって、患者の悲しみを乗り越え、悲嘆からの回復過程を促すことが必要であると考え、今回の研究を通して、不育症患者の心理・社会的状況を明らかにし、外来においてどのような看護の提供が重要であるのかを考えていきたい。

研究目的：不育症患者の心理、社会的状況について明らかにすることを目的とした。

研究デザイン：記述的探索的デザイン

研究方法

1. 調査時期：平成21年10月～平成22年1月
2. 対象：付属病院で不育症治療をし、出産後1カ月以上たった褥婦4名
3. 調査方法：対象者のプライバシーが保てるような個室で半構成的面接を行った。面接内容は本人の承諾を得て録音し、逐語録に起こした。録音内容は、研究終了後に完全に消去した。
4. 分析方法：質的帰納的分析を行った。
5. 倫理的配慮：研究の目的、方法、面接時の録音について説明し、文書による同意を得られた褥婦のみを対象とした。また、途中辞退の権利、守秘義務につ

いて説明し、同意を得た。

低用量アスピリン・ヘパリン併用療法の概要：排卵後、高温期に入った時点で低用量アスピリンの連日服用を開始し、妊娠35週まで継続する。あわせて、妊娠判定後より、ヘパリンの皮下注射を1日2回、12時間ごとに分娩まで継続する。皮下注射開始時、2泊3日の教育入院にて自己注射手技を習得する。

結 果

1. 対象背景：(1) 対象者の年齢は32歳から44歳であり、平均37歳であった。(2) 流産歴は妊娠4週～妊娠13週間の流産を2回～4回経験しており、平均2.5回であった。(3) 治療方法は4人の対象者すべて、低用量アスピリン・ヘパリン併用療法を行っていた。

2. 心理・社会的状況：面接で得た結果を(1) 不育症が分かる前(2) 不育症の検査・治療中(3) 妊娠・治療中に分類し、カテゴリー化した。面接結果を表1に示す。

考 察

1. 不育症が分かる前

「容易な妊娠とあっけない流産」、「仕方がない流産」、「流産の原因探索」といった内容からなる『妊娠と流産の繰り返し』、『流産手術の恐怖』、『周囲への気遣い』、『泣くこと』、『夫婦での話し合い・人生設計』、『仕事による気の紛らわし』、『同じ経験をした仲間探索』、『外出による気の紛らわし』からなる『悲しみの慰め』、『子どもがいないことへの周囲からの気遣い』、『突然の感情のあふれ』、『自分の行動に対する自責』が抽出された。対象は、結婚してすぐ妊娠したのという容易な妊娠とあっけない流産を繰り返しながら、これ以上傷つきたくないという流産手術に対する恐怖を感じ、次の妊娠に対する不安を抱えていた。そして、悲しみを慰めるために、泣き、夫婦で人生について話し合い、仕事や外出などで気を紛らわしながら、同じ経験をした人をホームページなどで探し、共感し、慰めていた。悲しみを表出する際は、心配させたくないため特に両親には話ができず、夫婦2人で問題解決に取り組んでいた。しかし家族からの2人が仲良かったらそれでいいからという子どもがいないことへの気遣いに気持ちが救われており、家族に自分の気持ちを分かちたいという気持ちがあると考える。様々な方法で悲しみを慰めていたが、外で妊婦や赤ちゃんを目

にすることで流産体験を思い出し、感情のコントロールができず涙があふれ、何がいけなかったのかと自分の行動や就業環境を責めるような感情が出てきていた。

平山¹⁾は悲嘆や喪の過程の現れ方は個人によって様々であるが、その経験自体は健康な心の働きであり、決して病的なものではないと述べている。悲しみを表出し、感情がコントロールできなくなることは当然のことであると対象、家族へ説明し、その人なりの回復の過程がおくれるように見守っていくことが大切である。また、同じ経験をした仲間を探していることから、対象は孤立や孤独を感じていたと考える。心配をかけたくないため家族ではなく第三者に話をしたいと思っていることから、いつでも相談できる、話しができる不妊症・不育症相談室の存在を、その対象者だけでなく妊娠を考えているすべての人にインフォメーションしていくことが重要と考える。

2. 不育症の検査・治療中

『妊娠から仕事への価値のすり替えによる気持ちの維持』、『専門治療へのこだわり』、『成功体験から安心感を得たい』、『治療への物足りなさ』といった『専門治療へのこだわり』、『正しい知識・教育不足』が抽出された。流産を繰り返すうちに妊娠しにくい年齢となったことで、妊娠をあきらめ、仕事に価値をすり替え自分の気持ちを保とうとしたり、専門治療へのこだわりからホームページなどで専門の病院を調べ、その治療に期待を持っていた。しかし、この治療は妊娠しなければ始まらない治療のため、今の自分にできることが何もないもどかしさから、治療への物足りなさを感じ、染色体検査など十分な知識を持たないまま検査を行っていることも窺えた。

不育症で流産を繰り返すうちに不妊症となり、不妊症治療を始める患者を外来で経験する。妊娠に関しては年齢要素が大きく、治療にも限界がある。また、検査に関して、専門治療へのこだわりから、できる検査はすべてしたいと、実際に内容をよく理解せずに行うこともある。このことから検査・治療に関する正しい情報提供と治療の限界について説明することが大切であると考える。そして、治療の成功体験として無事に出産した人たちの実際の声と、治療による苦痛や負担・辛かったことなどの体験談などが治療中の対象に届くような方法の検討が必要と考える。また、必要時不妊症の情報提供もし、タイミング法や妊娠へ向けての身体作りなどの指導も必要であると考える。

3. 妊娠・治療中の時期

「治療に対する期待」, 「自己注射の不安と負担」からなる『専門治療への期待と不安』, 『看護師への相談欲求』, 『同じ経験者との接触願望』が抽出された。治療により, 流産をしないという期待と, 毎日同じ時間に注射を行う自己注射への負担と不安があり, その思いを看護師に聴いて欲しい, 相談したいという欲求や, 同じ治療をして無事に出産をした患者から話を聞き安心したいという欲求があった。

自己注射は日常生活の時間の制限となり大きな負担とその副作用である皮下出血や疼痛などに不安を与えていた。2泊3日の教育入院で手技を習得しそれ以降は外来通院となる。そのため, 病棟と外来の連携をとり, 助産師外来, 不妊症・不育症相談室, 母親学級などを通して対象の不安を軽減できるようなかかわりが今後も重要である。また, 同じ治療をしている対象同士が話をできるような場の提供も必要である。

研究の限界

本研究は, 対象者が治療により出産した4名と少なく, 年齢, 流産回数2回の対象が3名であったため, また, 拳児を得られなかった対象がいなかったため, データの偏りがある。

結論

不育症患者の心理・社会的状況を抽出し, それぞれの時期の特徴が明らかになった。その特徴を踏まえそれぞれの時期に応じた正しい情報提供と, 保健指導, 悲しみや不安を表出できるような看護師のかかわりが必要である。

表1 不育症患者の面接結果

(1) 不育症が分かる前

妊娠と流産の繰り返し	容易な妊娠とあつけない流産	<ul style="list-style-type: none"> ・結婚したらすぐできたんですよ。妊娠が, 籍入れて, 12月に入れて4月にはもう妊娠したので, あ, 何だっていう感じだったんですけど。最初の子。でも結局流産でだめだったんですけど。 ・そろそろと思っていたら, 1回目がすぐできたんです。高温期がずっと続いている, でも出血してる, 何でだろう, と思って, 病院行ったら, 妊娠したんですが, だめでしたと言われました。体温表つけてなかったら自分でも気づかないくらいで, 5週目ぐらいでした。 ・1回目の妊娠は, ちょっと体調が悪くて, 付き合っている期間は徹底して避妊をしていたので, 結婚してもういいと思っていたら2回目妊娠した。2回目の受診の前に出血して, 止血剤とかうって, 次に受診した時にはもういませぬって言われて, 私の知らないうちにおトイレに行ってる時にそのまま。 ・結婚して1年ぐらひは別に何も特に基礎体温を測るとかはなにもしなくて, 自然にできればといった感じだったんですが, (中略) 排卵チェッカーで排卵チェックをして, その時にタイミングをみていたら, 1回目で妊娠して, ちゃんとしたらすぐできるんだっていうのが1回目にあっただんですけど。ただ, すぐ流産しちゃったんで, 5週目ぐらいだったと思います。
	仕方がない流産	<ul style="list-style-type: none"> ・流産した時, そういう風になると思っていなかったんで, 子どもができたらもう無事生まれるみたいな感じだったので, あ, そういうこともあるんだな, その時は悲しいというよりも, そういう事実もあるんだ途中でだめになるんだ。初めてだったのでふ〜んていう感じでしたけど。 ・1回目の時, 病院の帰りに泣きながら帰ったんですね。でも, あまり実感はなかったんです。5週目だったので。だから, 2回目の方が辛かったです。1回目の方は泣いたりしましたが, そんなに引きずったりはしなくて, ま, しょうがないなっていう感じで。 ・前かかっていた病院で, その先生が書いていた本を読んでいて, 病院でパンフレットもいただいたので, それに流産に対する現実というのが書いてあって, それを事前に読んでいたので, 年齢的なものとか, 確率的なものを。ま, (流産する確率が) 2割前後とか聞いていたので, しかたないかなと。 ・1回目の時はよくあるというとおかしいですけど, そんなに珍しいことではないっていうふう聞いていたので, そうだなっていう感じでした。
	流産の原因探索	<ul style="list-style-type: none"> ・2回も続いたので, 心配になって検査してもらったんです。そしたら数値が大きいので, 大学病院に行って調べてもらったほうがいいです, と言われて, インターネットで調べて, 有名な先生のところに行き着いたんです。 ・流産4月にして, その秋にまた妊娠はしたんですよ。それで, あ, できるんだと思って。そしたら, またそれもだめで, あ, それで, ちょっと考えないといけないかなと思って, でもその時は, 3回流産したら習慣性っていうって書いてあったので, その時はまだいけるかなと思ったんですよ。2回目時。

妊娠と流産の繰り返り	流産の原因探索	<ul style="list-style-type: none"> ・3回目(妊娠)の時はさすがに年齢が38か9歳になっていたの、ちょっと病院に行こうと思って、不育ではなくて、タイミング見てもらいたくて、(中略)、一応不育と不妊という普通の個人病院みたいなところへ行っただけなんですけど、そこでタイミング計ったのかな。で、排卵の注射して、何時間後っていうやつをやって、それで妊娠して、それでいけるかなと思ったら、12週ぐらいでだめになって、そこでその病院で改めて調べましようとなつて。 ・3回目はさすがに堪えましたよね、もうだめかなみたいな。でも一応調べようかと彼が言ってくれたので、原因がもし分かたらね、とそこで初めて調べたんです。 ・2回目も辛かったね、待って待ってだったからかな。前のときは原因が分からなかったからよくあることかと思っただけど、2回も続くとうしてだろうって。(中略)2回目の流産のあと、本格的に検査して。
	流産手術の恐怖	<ul style="list-style-type: none"> ・約1年後なんですけど、今度は同じ病院だったんですけど、成長とか、胎嚢とかも前回より大きかったりだとか、心音も確認できたので、先生も順調だとおっしゃっていたので、あとは、心音が確認できれば流産の確率もかなり減るっていうのはなんかで読んだり、聞いたりしていたので、自分の中では全然心配してなかったんですね。(中略)先生がその後内診して膣からのエコーをしたら、やっぱり残念ですけど、8週ぐらい、もう忘れちゃったんですけど、それで、手術をするか、自然に出てくるのを待つかということで、なるべく手術をしたくなかったの、じゃ、待ちますということで、もし生まれていれば12週ぐらいの時に、1カ月後ぐらいに自然に出てくるカタチで。 ・普通掻爬の手術とか、なくなった赤ちゃんを出すっていう操作が一般のみたいなんですけど、それを強制的にされなかったことにすごく感謝して、昔の人ってそういうことしてなかったと思うんですね、あと、外国も、自然流産させることが多いって聞いていたので、なるべくだったら、体が納得して出すまで、私はそうしたいと思ってたので、手術って怖い、肉体的にも精神的にも傷つくのもいやだし、台って基本的にいやですよ、みんなそうだと思うんですけど、そういうのがあったんで、これ以上自分の心も身体も傷つけたくない、っていう気持ちがあったんで、人工的な手術をしなかったことにすごく感謝しています。 1回目の手術を受けてからなかなか妊娠しなかったの、手術が悪かったんじゃないかって思ってたので、手術で、傷がついて、妊娠できなかつたらどうしようと思って、やりたくなかつたんですよ。
	泣くこと	<ul style="list-style-type: none"> ・とりあえず泣けば、泣く、泣くしかない、どうだろう、受け入れるしかない。 ・妊婦さん見たら、うらやましいんです、でも、それはしょうがない、割り切らないと外に出れないので、それはちょっと辛いところあるんですけど、あ～妊婦さんだ～とか、赤ちゃん抱いてる人とか見ると、うちの子もあのぐらいなのかな～とか、最初の子はあのぐらいなのかなとか、そういうのはありましたけど、そういう時は家に帰って泣くか、あたるか、泣きたいときは泣く、スカッとしますよね、とりあえず、涙も出なくなれば、次、お腹空いたってね。
悲しみの慰め	夫婦での話し合い・人生設計	<ul style="list-style-type: none"> ・話を聞いてもらったこと、話を聞いてもらって、これからのことどうしようって相談したり、2人でもういいじゃんって言ってきて、子どもがいない人もたくさんいるんだからその時は言ってくれて、そういう人生もあるんだからいいじゃんみたいな、そしたらそうかと思っ、それが一番乗り切れたのかなと思います。 ・やっぱりいろいろなことに意味付けをしていくことで、自分の中で処理していくしかないんで例えば突然私に不幸が来たというわけではなくて、やっぱりそうなるべくして言うたらおかしいんですけど、起きる意味とか、起こってしまったことは仕方がないので、今後どういうふうにするか自分の中に受け入れていこうか、お互い、夫婦間で、夫婦の距離感は大分縮まったと思います。同じ課題じゃないけど、そういう出来事があるって、結局、それを共感できる人って、旦那さんしかいないですよ。 ・2人で話を、言い合いとかもあるけど、話して解決する。仲いいもんじゃないですよ。とりあえず心の内を見せ合って、知り合ってすぐ結婚したので、言い合うとか真剣に物事を相談する機会がなかったので、結婚してからですね。話して、当たって、お互いに我慢しないで、とりあえず思っていることを言うみたいにして解決する。 ・もしできなくて子どもが生まれなかったら2人でどういう生活をしていこうかなというのは話したことはあった。
	仕事による気の紛らわし	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事は常勤ではなかったの、体の負担はなかった。1カ月は休んだ。あの一年は図書館の仕事があったよかったです。資格を取ろうと思ってたとき妊娠して、今回も、もし本当に妊娠できなかったらということ考えると、次へのステップとして何かできることと思って資格をとろうと思って調整しようとしたら、妊娠しました。 ・流産したときも仕事してました。考えなくていいじゃないですか、没頭すると、それが一番じゃないかな。 ・1カ月したら仕事に復帰したので、気がまぎれるというか、すごい仕事をしていて良かったと思いました。家にいたらもっと落ち込んでいたと思って。
	同じ経験をした仲間探索	<ul style="list-style-type: none"> ・2回あった時、同じような環境の人いないかなとインターネットでさがして、芸能人の人で、○○ちゃんという人の本を買ってたんですよ。で、読んで、症状が違うから、同じ病気じゃないよなと思ってたんですけど、一応検査したほうがいいと書いてあったので、検査したので、あの本を読んでなかったら、分からなかったと思います。 ・一番は同じ境遇の人に逢いたかった、同じ人が知り合いにいないかなと思いました。(中略)芸能人の本とか、同じ環境の人の本を読んで、あ、この人もそうだったんだと思うようにして、後、インターネットで探して、あ、同じだ～と思って慰めていたかもしれないです。 ・1週間後に入院だったんですよ。その時に、同じ病気の人が入院したんですよ、同じ日に入院して、注射の練習も一緒にして、その方もすごい苦労されていて、最初の入院は暇じゃないですか、3、4時間ずつとしゃべっていて、同じ境遇だったんで、わかるわかるって。

<p>悲しみの 慰めの 気 の 紛 ら わ し</p>	<p>外に出るようにして、本を読んだり、気晴らしをして、買い物とか、公園とか、化粧品屋さん遊びに行ったり、とかしてました。</p>
<p>周囲への 気遣い</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・親にも心配をかけるので言えなかったのも、彼に当たっていたのかも知らない。たぶん、友達にも別に言わなかった。言わないっていうか言えない。みんなうまくいっている友達には言えないですね、なんとなく。 ・母親には（流産の話）していないですね。離れているし、心配かけるのもいやだったので、1回目の流産のときは、もう言ったんですけど、2回3回になると、ますます心配するんで、妊娠したって言うのも言わない、安定期になったら言おうかなと思って、安定期になる前に全部だめだったんで、たぶん母親は知らない。その時はね。 ・友達とかにも全然言わなかったですし、やっぱり絶対なってみないと気持ちなんてわかんないと思ったので、友達とかにも言えなかったですし、両親に言うのを遣っちゃうんで言えなかったですし、芸能人の本とか、同じ環境の人の本を読んで、あ、この人もそうだったんだと思うようにして、後、インターネットで探して、あ、同じだーと思って慰めていたかもしれないです。 ・2回目のときは、（中略）人工的に産道を通した方が、私の体的にたぶん楽になるからって、陣痛やって出したんで、そのあと1カ月ぐらい仕事も休んだんですよ。その時のほうがしんどかったです。実家に帰っていて、回りの人が気を遣ってたんで、あんまり気を遣わせたらいけないなというのがあって、あんまり考えないようにしてました。寝てました。泣いてたのは最初の1日2日で、もう考えるのやめようと思って。思い出すと辛くなってきますね。まわりも気にしてるから、自分の気持ちは言えなかったです。
<p>子どもの 周囲から の 気遣い</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・主人のお父さんがその時すぐにお見舞いに来てくれて、二人が仲良かったらそれでいいからと言われたことが印象的で救われた。だらだら引きずってはいたけれど（以下略）。
<p>突然の 感情の あふれ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2回目だったので、ずっと順調だったので、凄くショックはショックだったのと、あと、全然こう気持ちのコントロールができなくなるんですよ。短い期間だったんですけど。あと、歩いててわーっと涙が出てきたりとか、そういう不安定な期間が1カ月くらいあって。 ・悲しくなったり、切なくなるのって人のいる時じゃなくて一人の時なんですよ。ほんとに一人になるとそのことばかり考えて泣いて過ごしてた。なにかのきっかけで涙が出てきた。地下鉄で赤ちゃんをみて、しばらくしたらぼろぼろ涙が出たり。
<p>自分の 行動に 対する 自責</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・分かってて手術をしたのと違って、分からないうちにいなくなっちゃって、トイレに行っちゃったのかな、どこ行っちゃったんだろう、治療でまだお腹にいられるだろうと思ってたので、自分を責めるっていうか何でだろうって切なかったです。この時は仕事をしてたので、寒かったのかなとか何がいけなかったのかとか考えましたね。どんな風だったかな。泣いてたね。もう思い出せないや。悲しかったことは悲しかったし、辛かったし、友達にも話していたので、駄目になっちゃったと言わなければならないことも辛かった。それは乗り越えられなかった、だからぐずぐずと過ごしてたし、何かにつけては思い出していたような気がするし、何が悪かったんだろうって思ったし、その病院じゃなければよかったんじゃないかと思ったし。
<p>(2) 不育症検査・治療中</p>	
<p>妊娠への きざり の 事 への 価値 と 代 替</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・もう妊娠しない歳になったかと思ったんですけど、ずっと基礎体温つけていたので、分かるじゃないですか。タイミングが。タイミングが合う時はなるべく合わせてたんですけど。妊娠なくて、で、転職になって、パファリン飲むのもやめたんです。それで仕事に生きようと思ったんです。人工授精とかするのもしやだったんで、結局また受精しても、どうなるか分からないじゃないですか。
<p>専門治療への 期待と不安</p>	<p>専門治療へのこだわり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バリバリ仕事をしていたら、突然妊娠が分かって、あわてて彼が調べて、ここに行きなさいって。全部やれることはとりあえずやりなさい。パファリンだけじゃだめだから、ヘパリンも。分かっていたんです。私も。さすがに5回も流産とかすると、一応ちょっと調べるじゃないですか。病院も。 ・ここ来た時は、もう6週だったんですが、検査は一応したんです。最初は違う病院に行ってパファリンをもらって飲んで。この病院はヘパリンをやらない病院だったので、彼的にはヘパリンをやって欲しいと、だからここに来たんです。その結果で、ヘパリンをやりましょうということになって。 ・不育症、習慣性流産とか言われて、調べるんだしたら〇〇大がいいと紹介されて行きました。 ・事前に、こちらのHPを見ていたので、アスピリンだけで40%ぐらい、併用で、70~80%ぐらいと知っていたので、個人的なことであれば飲み薬だけで済ませたいって言うのはあったんですけど、私が注射をすることで赤ちゃんが順調ならば、しょうがない。選択の余地がない。 ・自分の意思で調べに行きました。なんか、これ以上繰り返すのいやだなと思ったんで。とりあえず、調べて安心しておこうと思ったら、大学病院に行ってくださいと言われてたんで。で、再検査してもらって、薬を飲み続けなければいけないと、しばらく通っていて、そうこうしているうちに、ホルモンバランスがおかしくなっちゃったみたいで、生理周期がすごいまちまちになっちゃったんですよ。（中略）不妊治療専門の病院に通ってました。友達の紹介で。で、妊娠したら、すぐ来てくださいと言われていたので、すぐ行って。

期待と不安 専門治療への	安心感を得たい 成功体験から	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ境遇の人と会いたいというのがあって、(中略)分かったときに無事に生んだ人の話を聞きたい。こういう病気でもちゃんとできるんだよというのを一番最初の段階で知っておきたかったので、一番最初の3日間の入院で、もし、隣の病室で無事に生んだ人がいたら、話とかすごい聞きたいなと今となれば思いますね。 ・経験談とかもっと聞けてたら不安とかなかったかもしれませんね。費用とか、こんな経過をたどっていくっていうのを聞けてたら、よかったかも。
	物足りなさ 治療への	<ul style="list-style-type: none"> ・今思えば、タイミング指導をしてもらえると書いていたんです。生理も順調だったし、タイミングが合っていないだけじゃないかと思っていたから、カウンセリングじゃないけど、もっと自分たちの性生活の相談をして、それから検査と思っていたから、ほんとにこれでいいのかと物足りなかったです。体はなんともないし、自分たちでできることを教えてもらえると書いて期待していたのにという気持ちがありました。 ・アスピリンの期間が長かったら、辛かったと思うけど、それが短かったからよかった。その期間に自分たちができることが、それしかなかったから、もっと何かできることを教えて欲しかったって思うと思います。
教育不足 知識・正しい		<ul style="list-style-type: none"> ・前の病院で、パファリンで大丈夫じゃないって言われたんです。3回目の流産の後、パファリンで治療しながらとっている時に転動になって、違う病院でもう1回検査をしたんです。遺伝子とか全部、そしたら、やっぱりパファリンでいいでしょうと言われて。
(3) 妊娠・治療中		
	流産への不安	<ul style="list-style-type: none"> ・血液検査を受けている時に、看護師さんに妊娠したのはいいんですけど、やっぱり怖いというのがあって、話しているうちに、涙が出てきて(以下略)。 ・超音波検査のたびに、だめって言われたらどうしよう。超音波をするのがいやだった。お腹の上から超音波を見れるようになって、ここまで来れたかと、次に胎動を感じた時に安心しましたね。妊娠中は不安なことはあまり話さず、いいことだけ主人に言っていました。心配かけたくなくて、不安なことを言うと、そうやってしまいそうで。 ・2回目が染色体異常って言われて、原因が分かってほっとしたよね。でも、次もそうなるんじゃないかっていう不安はありました。 ・(ヘパリンを)やり始める前は、この子がまただめになったらどうしようという不安が一番強かった。
期待と不安 専門治療への	自己注射の不安と負担	<ul style="list-style-type: none"> ・今でもこの治療がプラスになっているのかわからないというのがあります。たまたまこのタイミングだったのかって思うこともあるし。(中略)注射が始まってからは、時間を気にして、青ざめていく足を見たり、朝起きたら血だらけだったりして、不安に思った。何度も病棟に電話しました。私だけですよ。こんな。飲み薬は思わなかったけど、注射は負担にならなかったといたらうそになるね。お産が終わって、注射終わったねって言われてほんとにほっとしました。 ・彼的には一刻も早く、という感じだったんですが、私的には、ヘパリンで注射するじゃないですか。それがいやで、自分で注射、え〜、という感じで、パファリンだけでいけるだろと思って、でも、担当してくださった先生が、ヘパリンをしたほうがいいといたので、即、決めました。この結果を見て、注射への期待よりは不安のほうが強かった。
	治療に対する期待	<ul style="list-style-type: none"> ・前回は駄目かなっていうのが分かったんですけど、なんとなく。今回はなんとなく、大丈夫って思いました。医学的なバックアップもありましたし。 ・治療はうけてほんとによかったね。信じるしかなかったから。 ・注射怖かったけど、やるしかないと思いましたね。医学の力でできるっていうので、ありがたいと思いました。
	看護師への相談欲求	<ul style="list-style-type: none"> ・専門の人を知っていたら、もっと話していたし、話したいと思いますね。 ・やっぱり看護師さんと話ができてたら、先生から聞いたあとすぐに疑問に思ったことを聞けるところがあれば、あの短時間では聞けない時もあるし、いっぱい待ってるし。こんなこと聞いていいんだらうかとかいうことでも看護師さんになら聞けるので。カプロシンを受けると決まった時、〇〇さんが私が担当ですよ、一緒にがんばりましょうと言われて、お顔もしっかり覚えて、私は何か困ったことがあったら、この人に聞けばいいんだって思っていたのに、結局会えなくて。何度か探したんですけど、そのうちそういうものだってあきらめて。 ・血液検査を受けている時に、看護師さんに妊娠したのはいいんですけど、やっぱり怖いというのがあって、話しているうちに、涙が出てきて、その看護師さんに1時間ぐらい話を聞いてもらったんです。で、その後に専門の看護師さんがいるんですけど、〇〇さんと呼んでくれて、そこでまた1時間ぐらい話を聞いてもらって、その時に、人に話を聞いてもらえてすっきりしたんです。うれしいよりも不安のほうが大きくて、また、だめになるんじゃないかって、それを話し聞いてもらえただけですごく楽になって、2時間泣きながらしゃべっただけで、すごいすっきりして、(中略)誰かに話を聞いて欲しいというのがあって、話を聞いて欲しいのは赤の他人のほうがいいですよ。
	同じ経験者と の接触願望	<ul style="list-style-type: none"> ・できるんだったら、同じカプロシン治療を受けている人同士で、そういう話ができるとか、そういう機会があれば参加したかもしれない。先生や看護師さんはこの人カプロシン治療しているって分かるけど、来ている患者さんはみんな正常じゃないかって思っているんですね。(中略)同じ経験をした人がいれば、あ、この人もがんばっているんだ、ほかの人もがんばっているんだと、すごく気持ちの中では勇気づけられることもあるんで。そういう場があればもうちょっと安心っていうのがあったかも。

同じ経験者との 接触願望	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ境遇の人と会いたいというのがあるが、後半になると、母親学級があつて、同じ病気の人がすごく多くてびっくりして、みなさん同じ回数苦労されていて、年齢も同じくらいなので、もうちょっと早い段階でそういうのがあればよかったなというのがあるが、後半じゃなくて、分かった時に無事に生んだ人の話を聞きたい。こういう病気でもちゃんとできるんだよというのを一番最初の段階で知っておきたかったので、一番最初の3日間の入院で、もし、隣の病室で無事に生んだ人がいたら、話とかすごい聞きたいなと今となれば思いますね。 ・やっぱり同じ経験した人じゃないとわからないっていうのはありますから、不安な気持ちとか話せる人がいなかった。
-----------------	---

引き起こす。産婦人科の実際 2003; 52: 233-237.

文 献

1. 平山史朗ほか：不育症の心理的ケア。産婦人科治療 2001; 82: 567-572. (受付：2011年11月30日)
2. 杉浦真弓：反復流産において抑鬱状態はさらに流産を (受理：2012年1月27日)